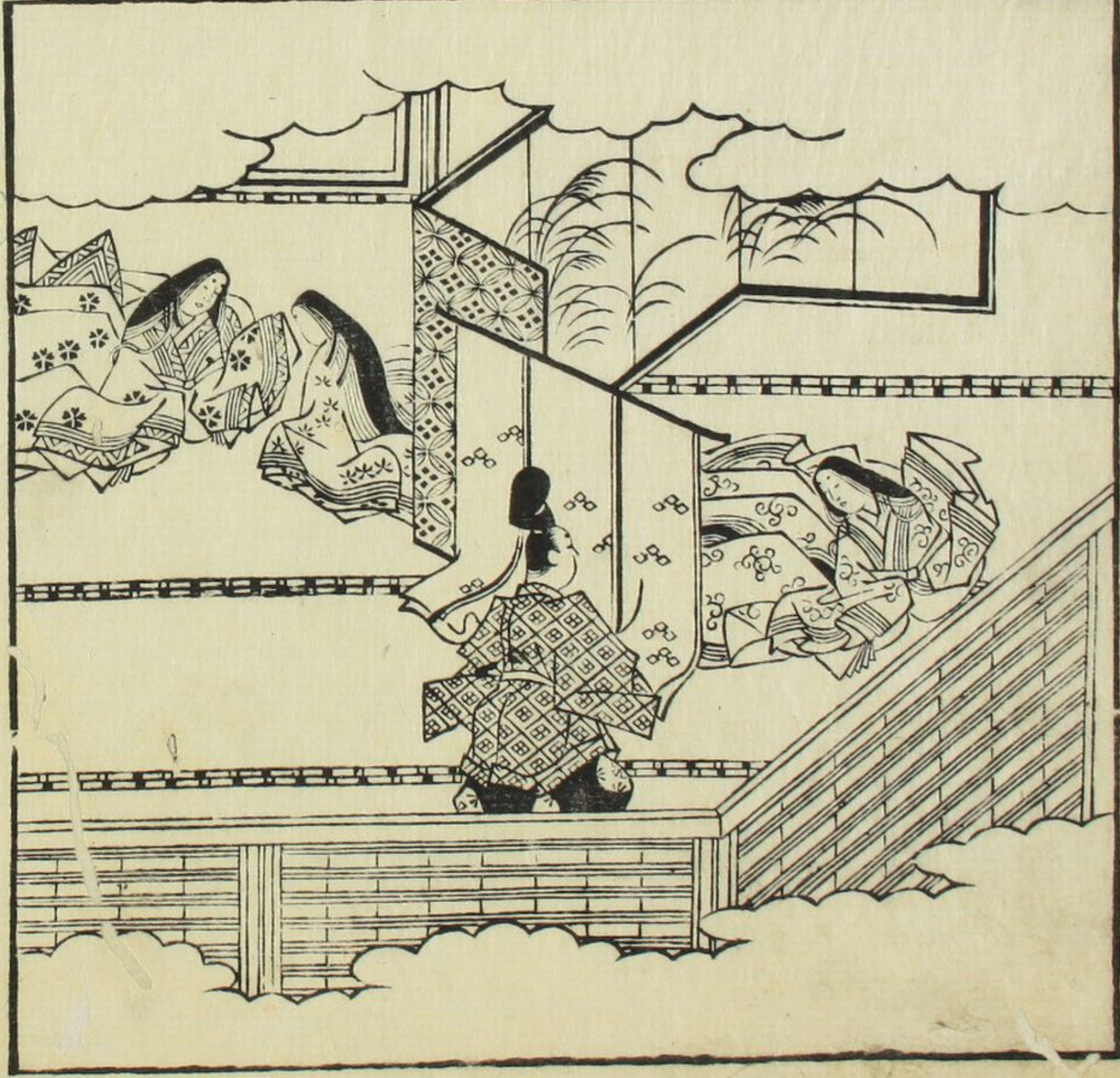




入繪
 源氏袖鏡
 下

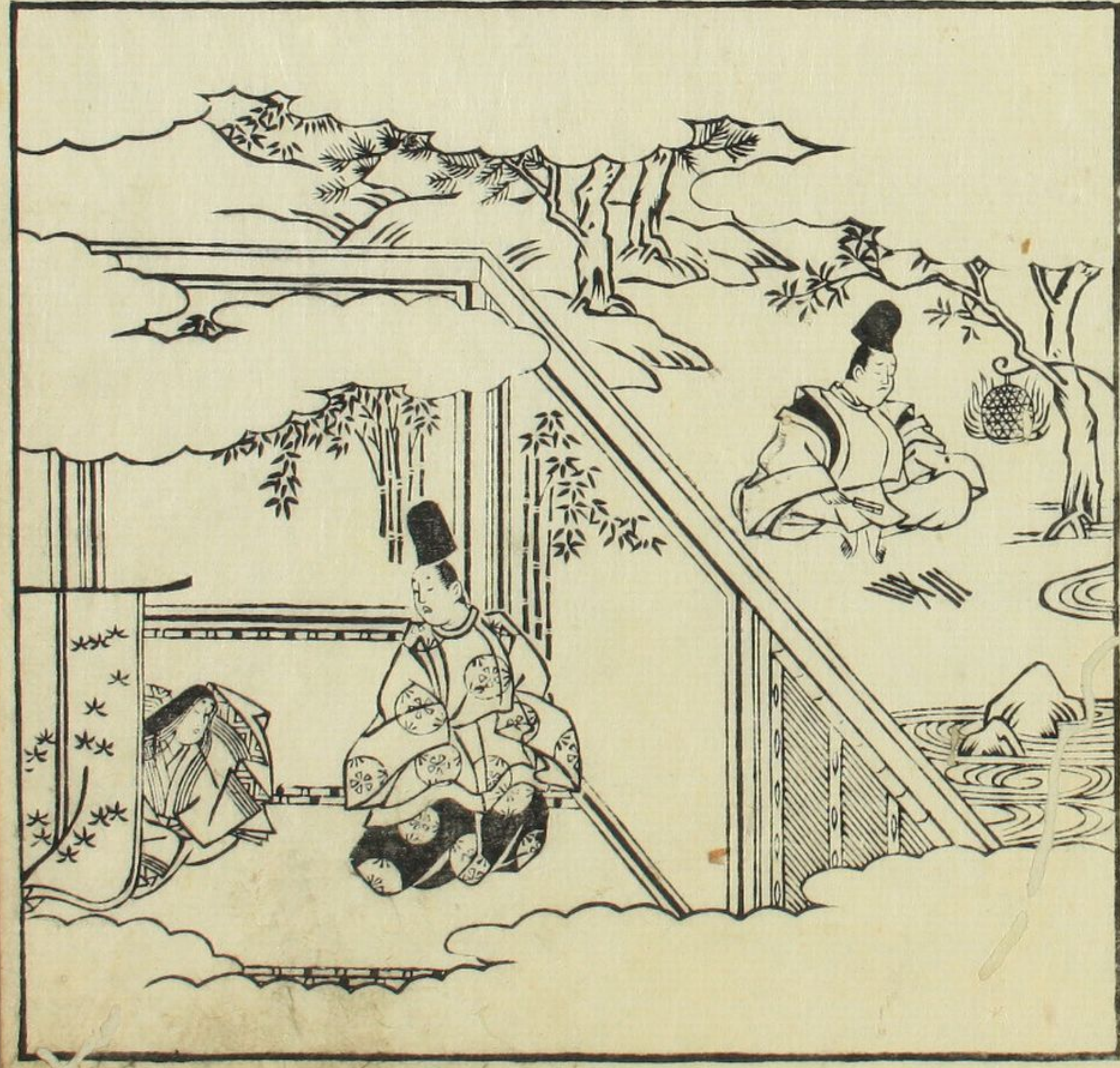


とこあけしつゝあつひ
 まつりのつせせまふるこ
 とあつひのつせせまふるこ
 方此にたふさつてはた
 とそのつてあつひまの
 明佳とつてあつひまの
 のあつひまのつてあつひ
 又あつひまのつてあつひ
 くれあつひまのつてあつひ
 けいあつひまのつてあつひ
 云はれあつひまのつてあつひ
 まつりつてあつひ
 とつてあつひまのつてあつひ
 要法寺上人女因
 とつてあつひまのつてあつひ
 花のあつひまのつてあつひ

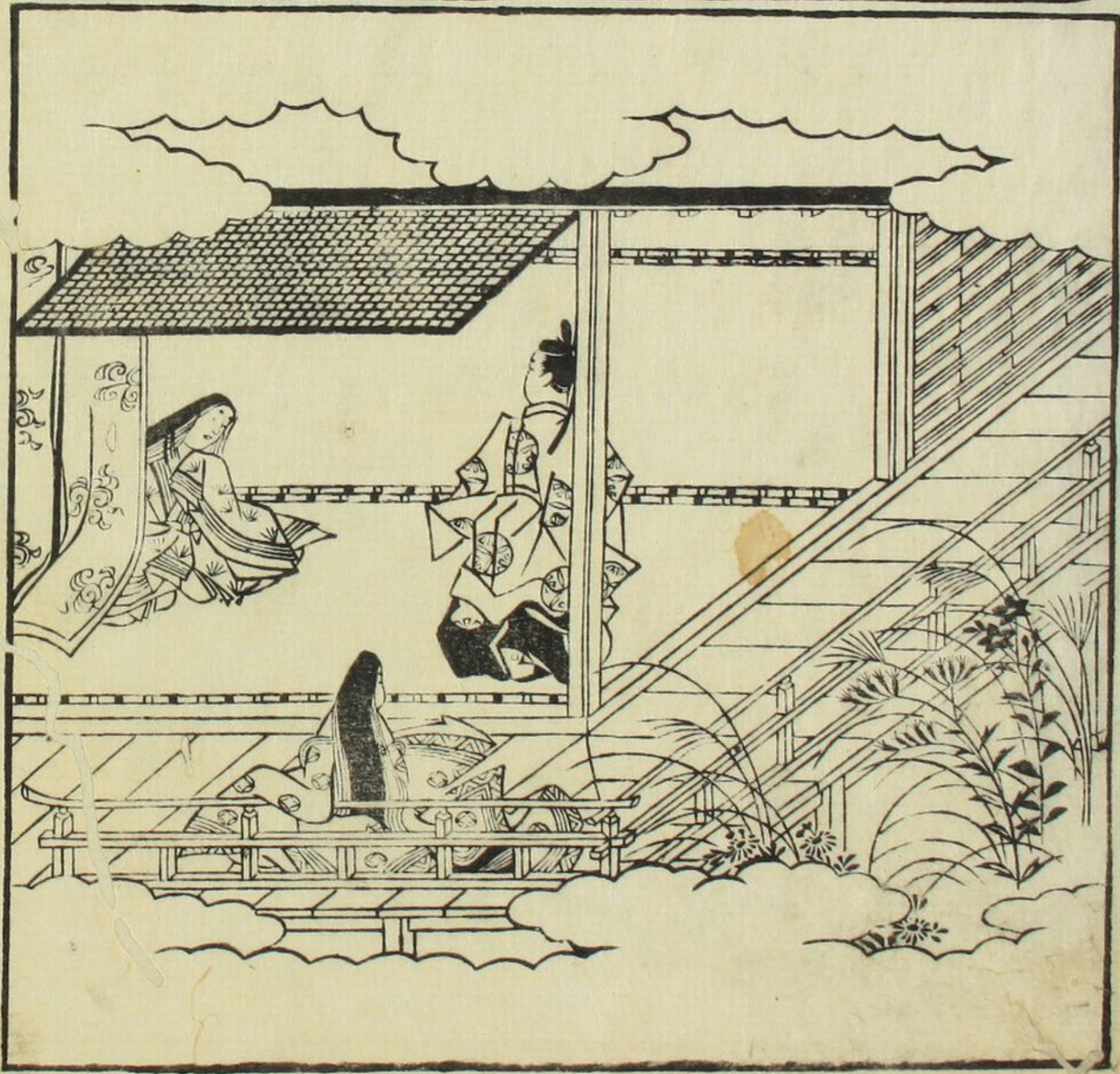


源氏十六

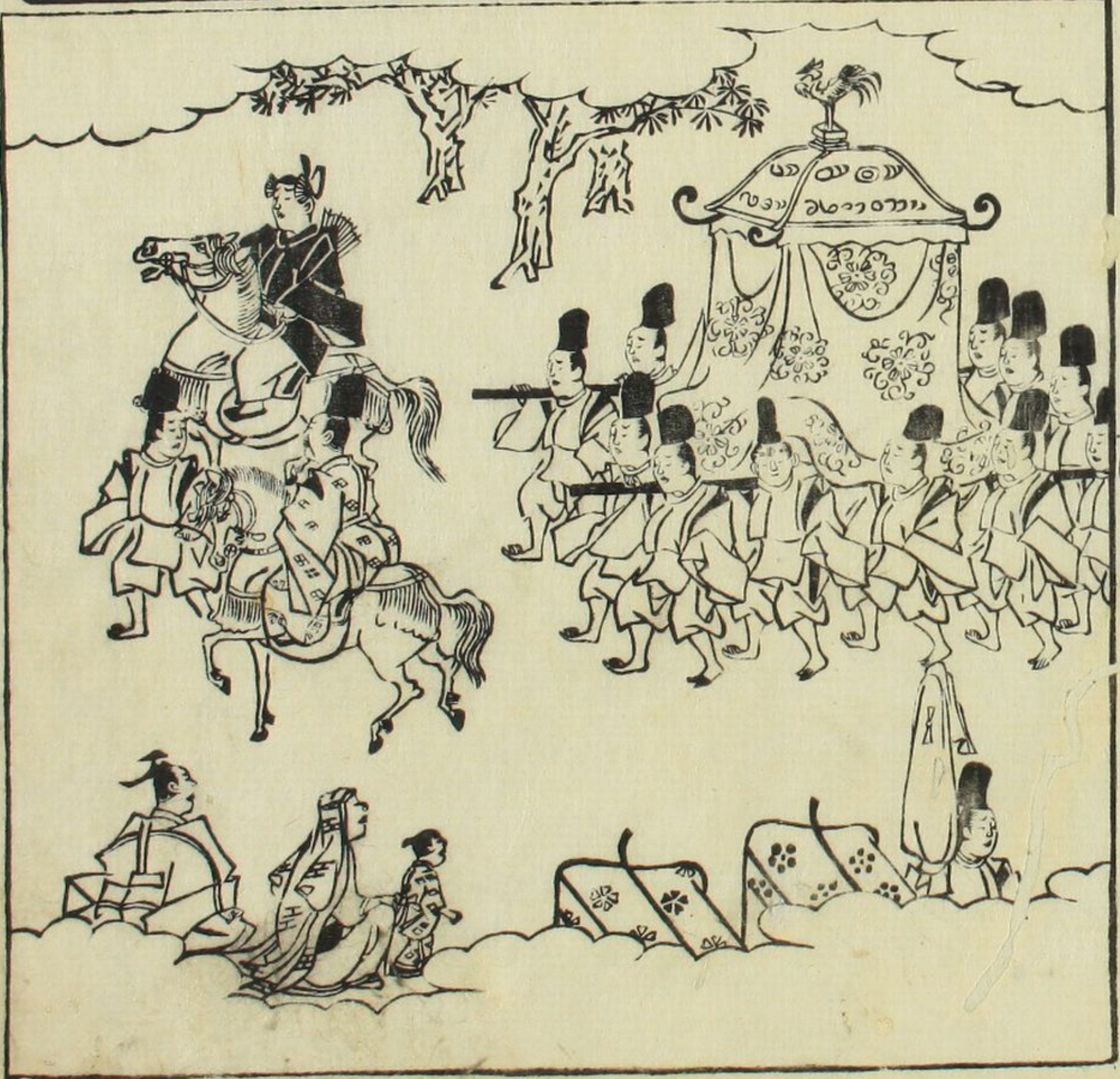
わりの火あつひ
 源氏あつひつてあつひ
 けいあつひまのつてあつひ
 あつひまのつてあつひ
 見あつひつてあつひ
 まのあつひつてあつひ
 かつひつてあつひ
 火あつひつてあつひ
 まあつひつてあつひ
 わりあつひ
 まつりあつひ
 野は氏立團
 わりあつひ
 けいあつひ



此の八月は天の風が
 物さつてくちをさぬ
 物さつてくちをさぬ
 の中の中ねそおの
 けりまのを升あつ
 らういひれひらと
 あつていけて風の
 さいはいのあつて
 ひらきよすりおひ
 けあつていひらきよ
 風さつてくちをさぬ
 夕やあつてくちを
 さつてくちをさぬ
 風乃おん人
 野分



三つと
 大原北の
 りの
 月之
 吾
 沙幸
 江崎
 女
 さらの



十八 梅うえ
正月雨月此は清雪の
却て此は寒花よき花
初命さうあさうわら
舟花の四方ららちら
るさう梅うえよみ付
てらんあつたつた
手物入ふ葉のなた
つひ白さうつたた
今梅と花てむし付
花乃善か
ちりあ梅
さうさうさう
神よあさう
け新ゆん
勢初山田佳光貞業
梅うえの初花さう
去乃毎



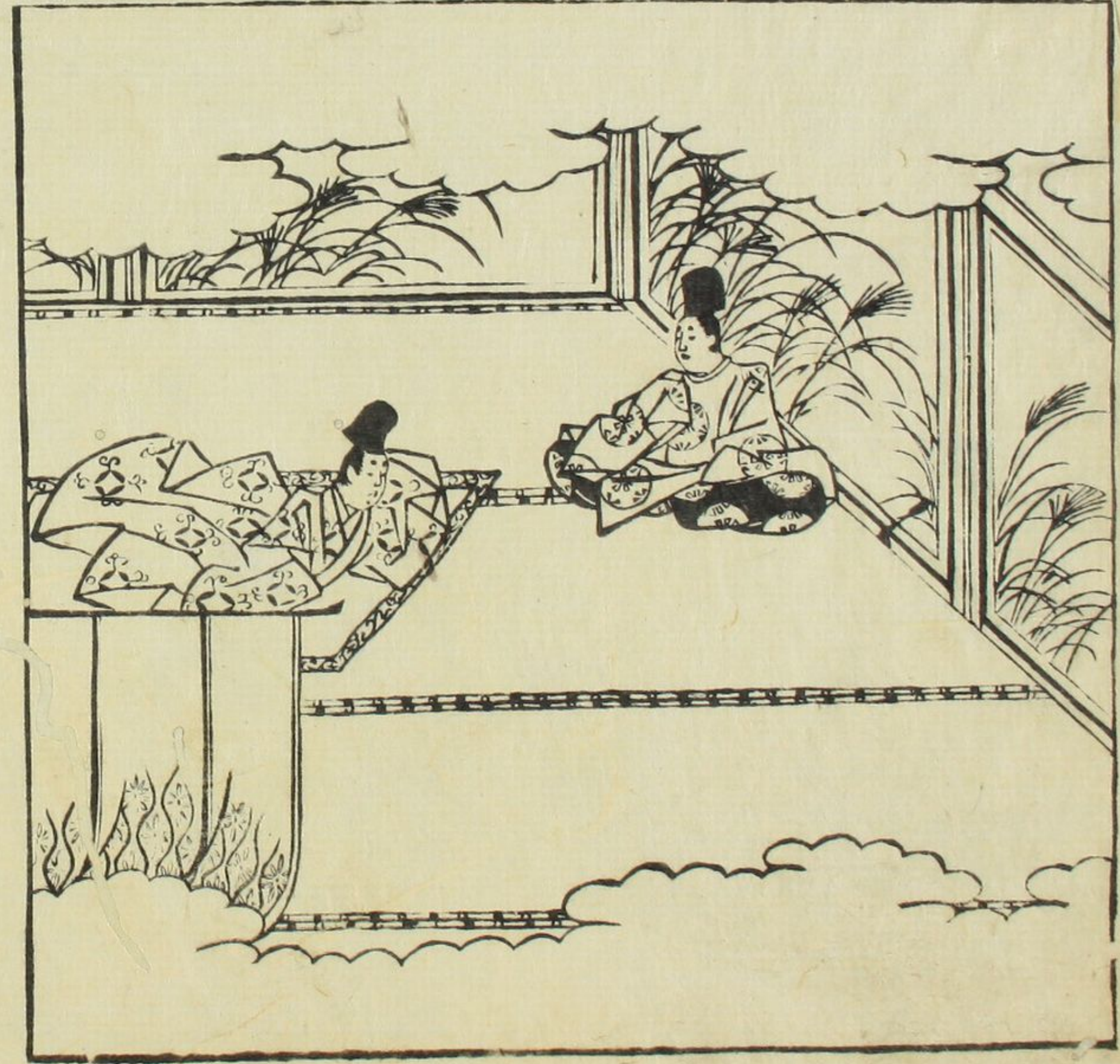
十九 梅うえ
毛茸ありのひあまさ
まのあまねをて年と
あつたはゆきさうは梅
もさあつたはゆきさ
ゆきさつたはゆきさ
うらにんねとさうは梅
もはさうさうは梅
あつたはゆきさ
さうさうさう
又あつたはゆきさ
さうさうさう
さうさうさう
奥西友三
さうさう
梅
さう



保氏十九

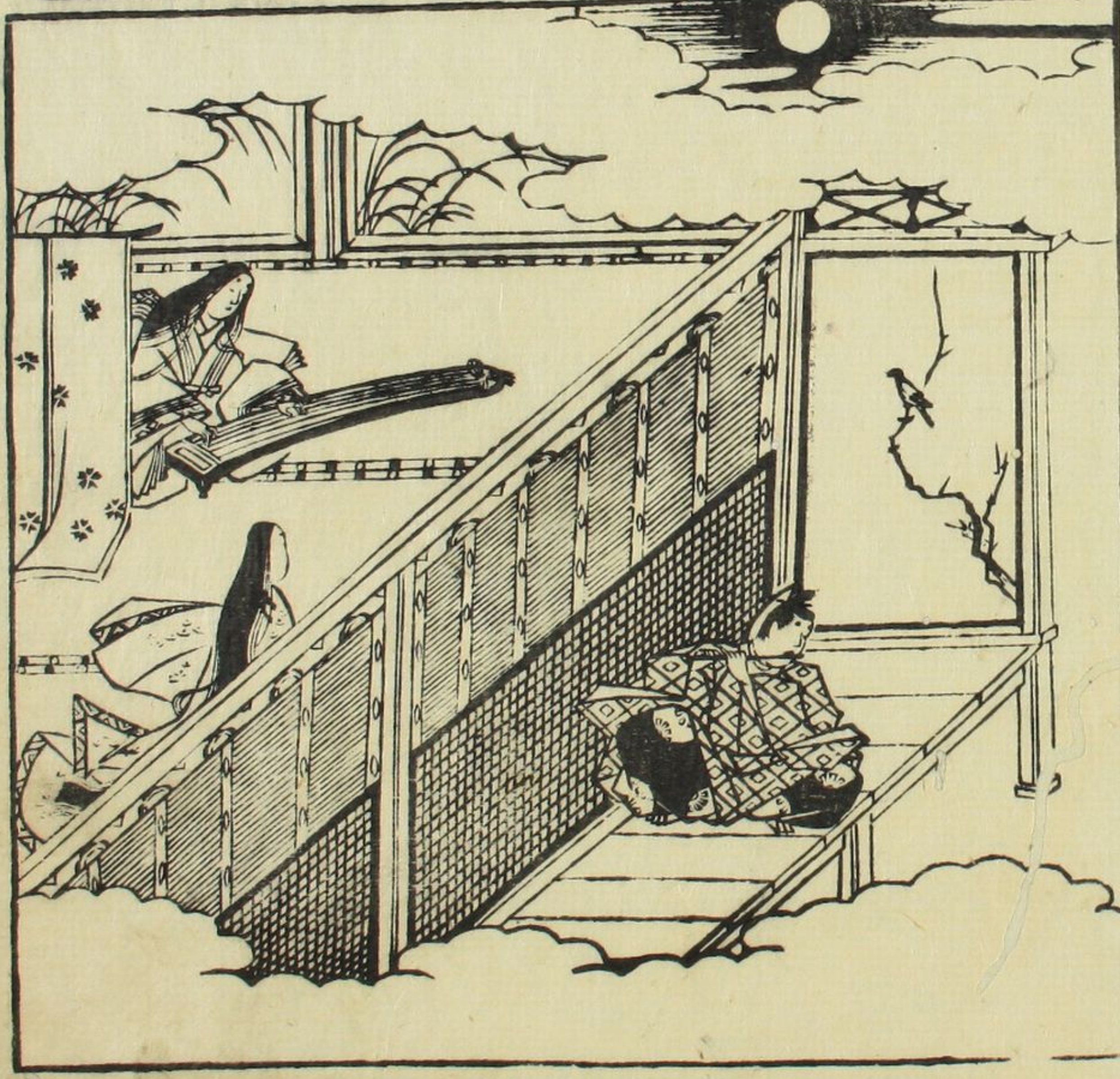
柏木
 後はとく
 白きむす
 むきりま
 之ぬきの
 なまのこ

市町一采
 月日星雲
 乃そふか
 中河氏喜雲
 海氏酒
 といり



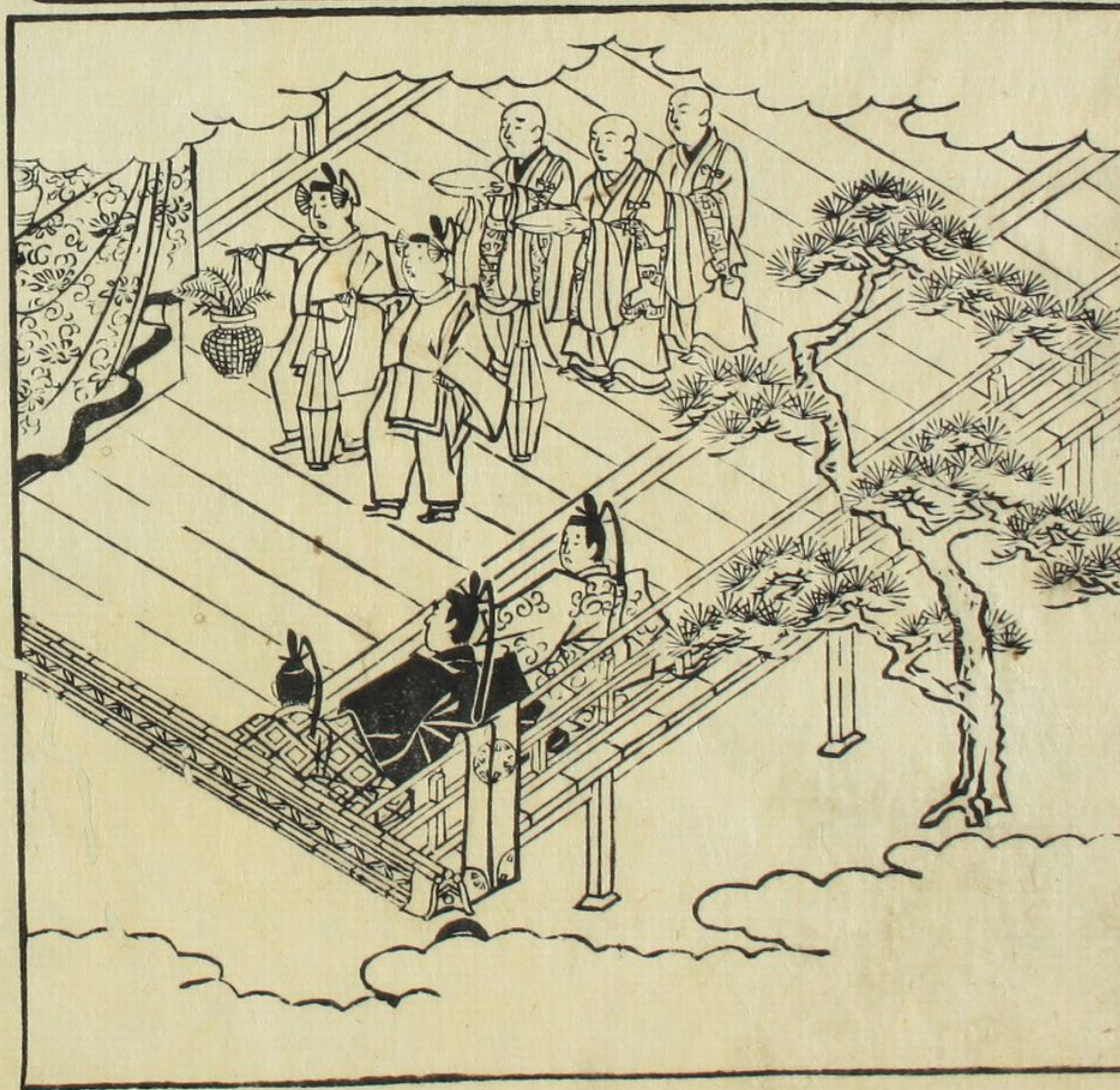
横巻

市二りこあえ
 の悲の乃を
 方一采の
 乃そふか
 中河氏喜雲
 海氏酒
 といり

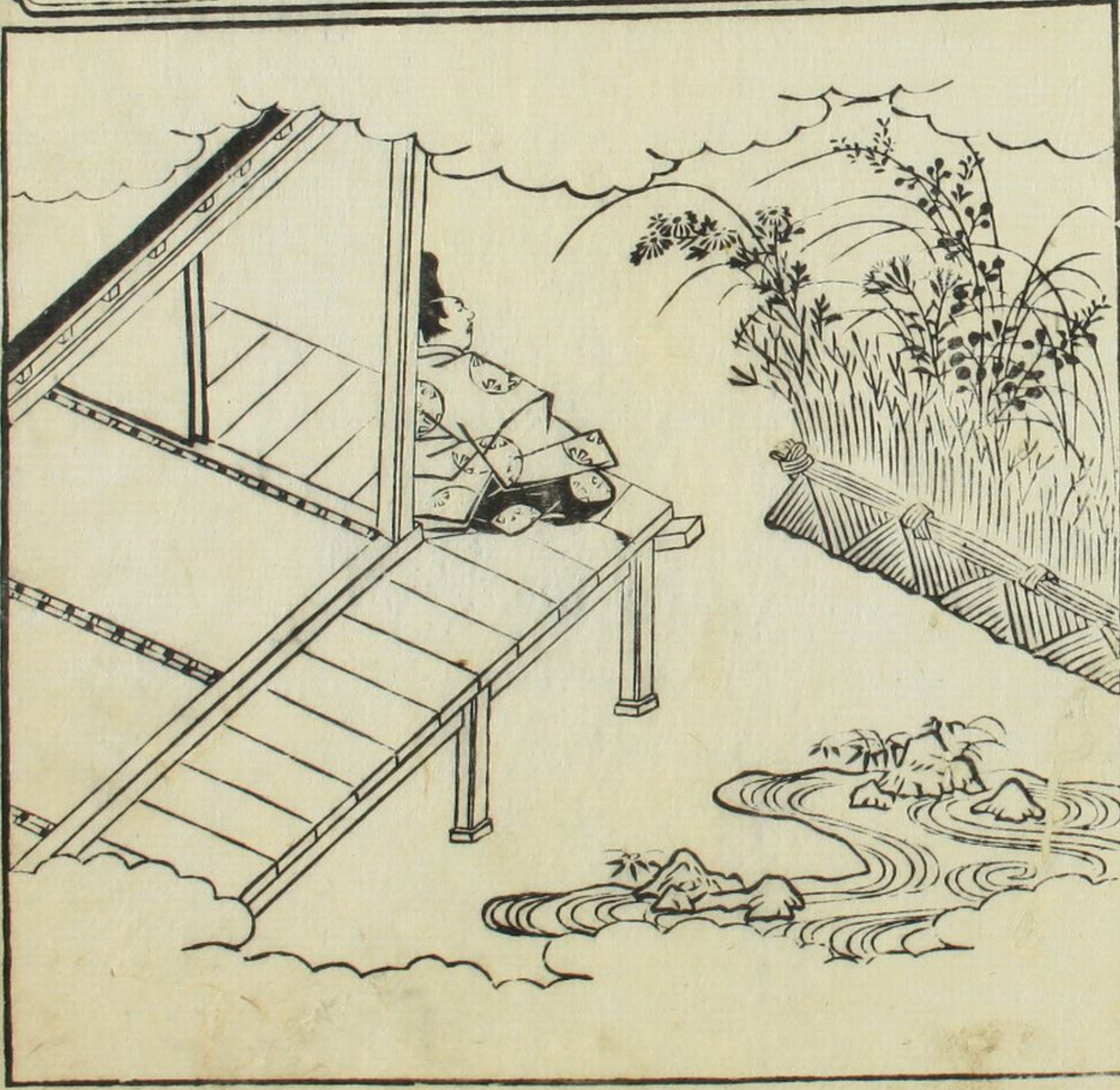


海氏酒

苗みのり
 ひろくちのよきとよき
 とき年結千枝ありけし
 の水くわりのりきき法
 名きつとひ十四日
 こそくろりりりりりりり
 花のうすれくさるる
 多そあふさみのあふ
 一あふさふさふさふさ
 中此らりりりりりり
 花らりりりりりりりり
 ひろくちのよきとよき
 大分此結りりりりりり
 こそりりりりりりりり
 ！きりりりりりりりり
 江戸住玄礼
 麻の角結りりりりりり
 二月堂

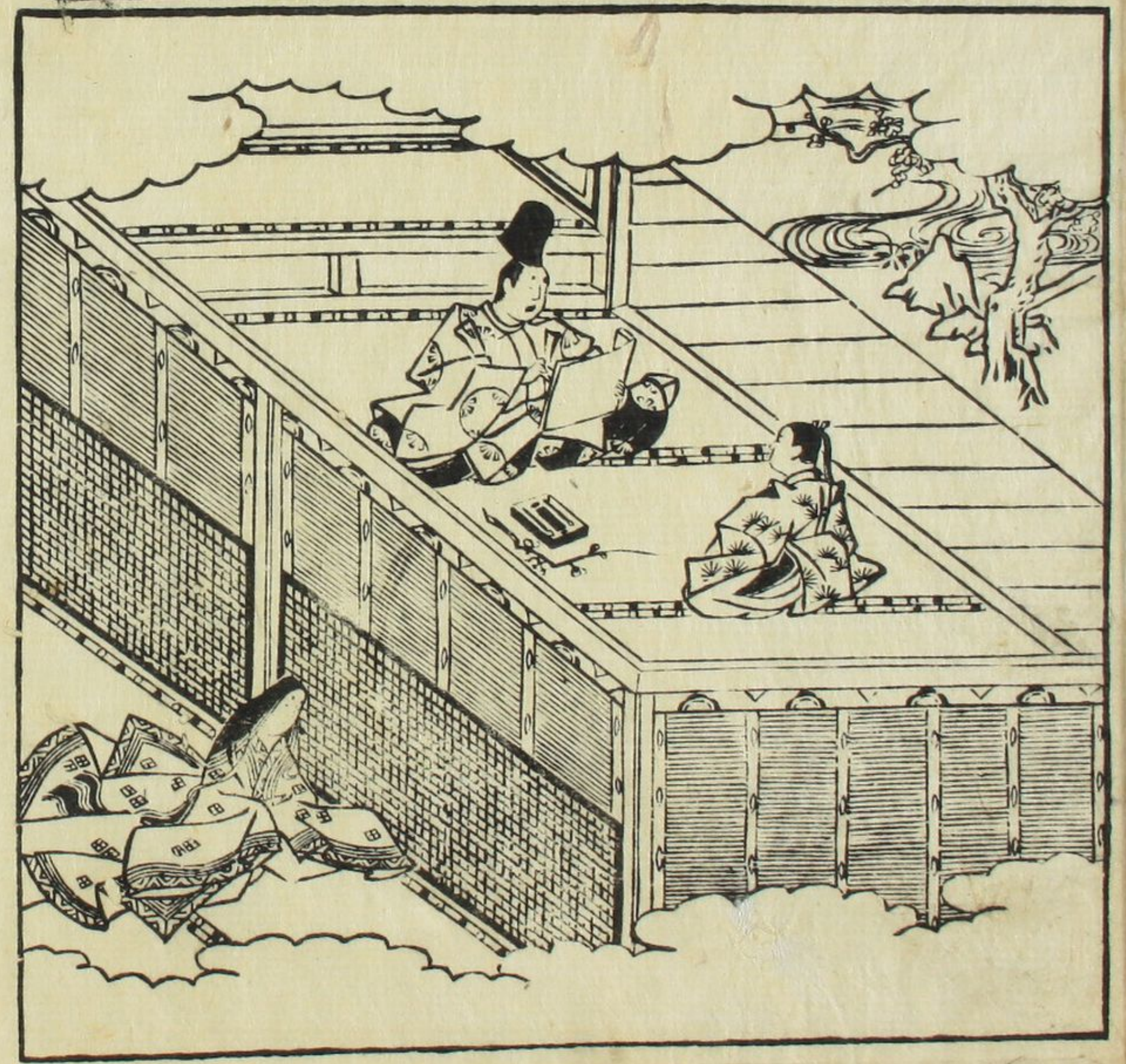


十五
 中ねり
 海成乃大長とん
 ちけりあつては
 大さき
 ねりりりりりりりり
 長よき
 かねこねん
 沙あつては
 けりりりりりりりり
 西村氏重俊
 かねりりり
 かねりりり
 ねりりりりりりりり



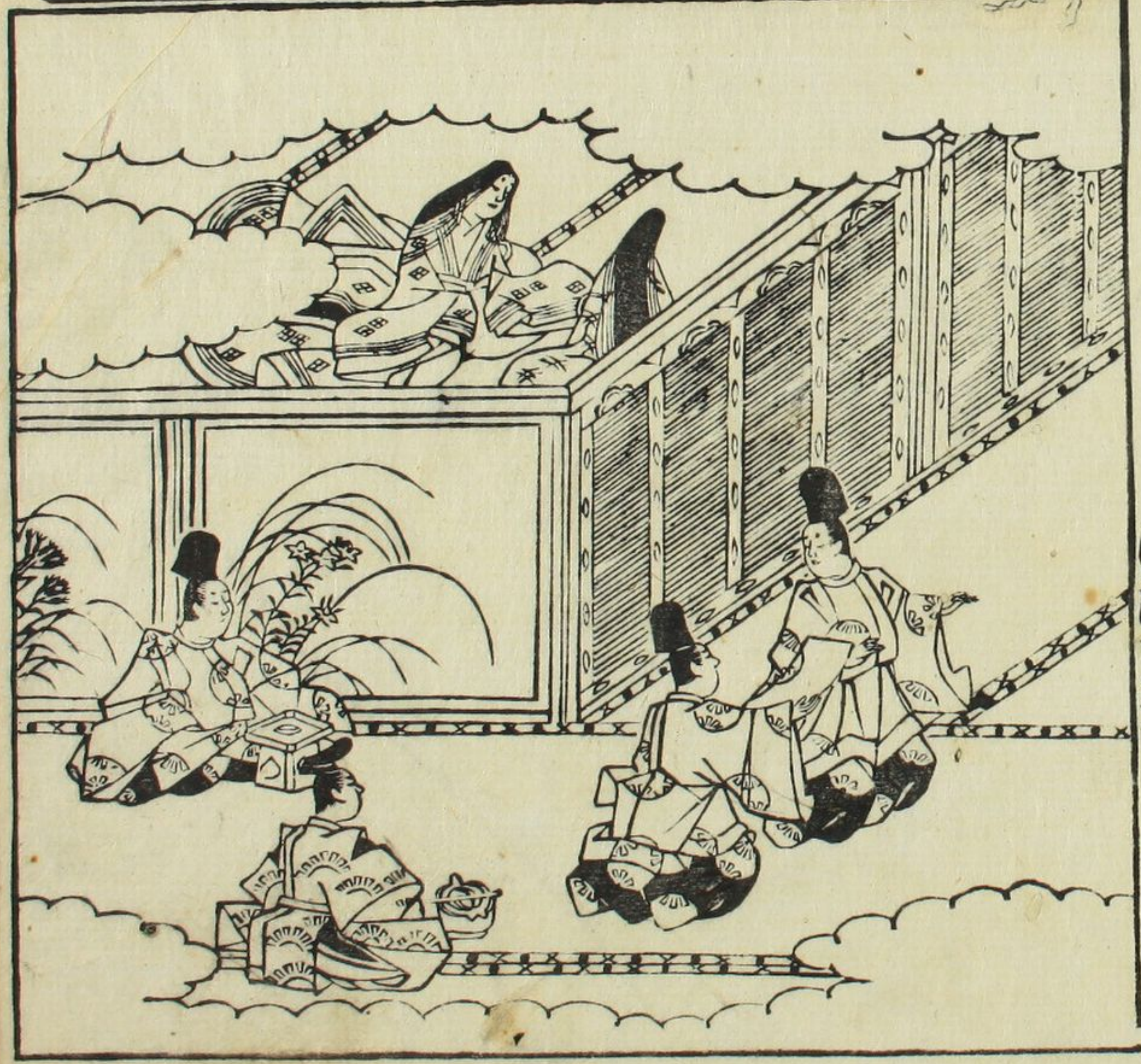
紅梅
 心ありて
 凡のぬえん
 りの物よ
 まつらひその
 と八むあまき

あつたひの
 めいり
 言形氏梅盛
 ありて
 今衣も



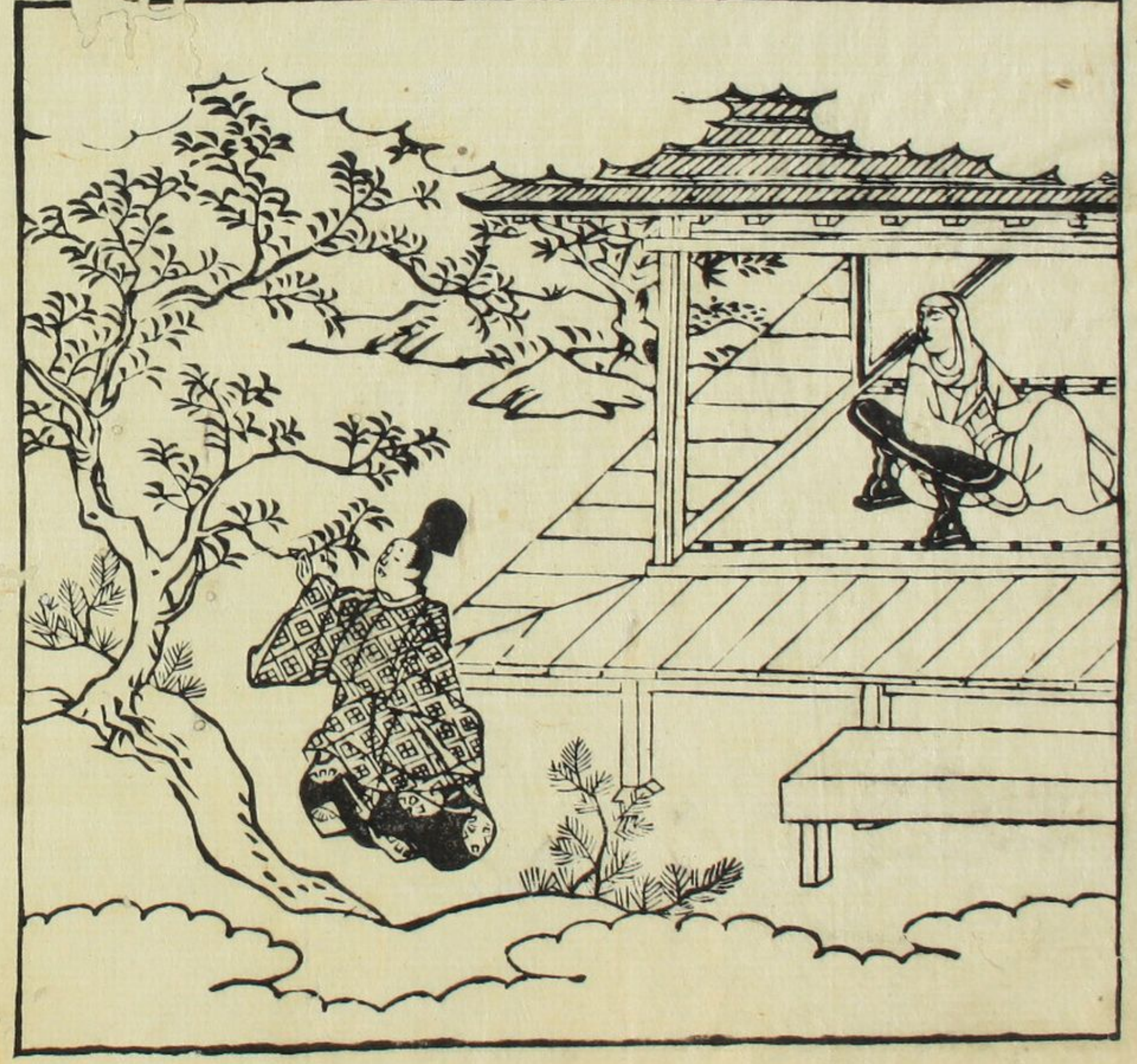
竹川

あけ川
 けを竹川とて
 八ふふたねらふ
 あけ川
 一
 あれあはの
 大坂
 あけ川
 あり

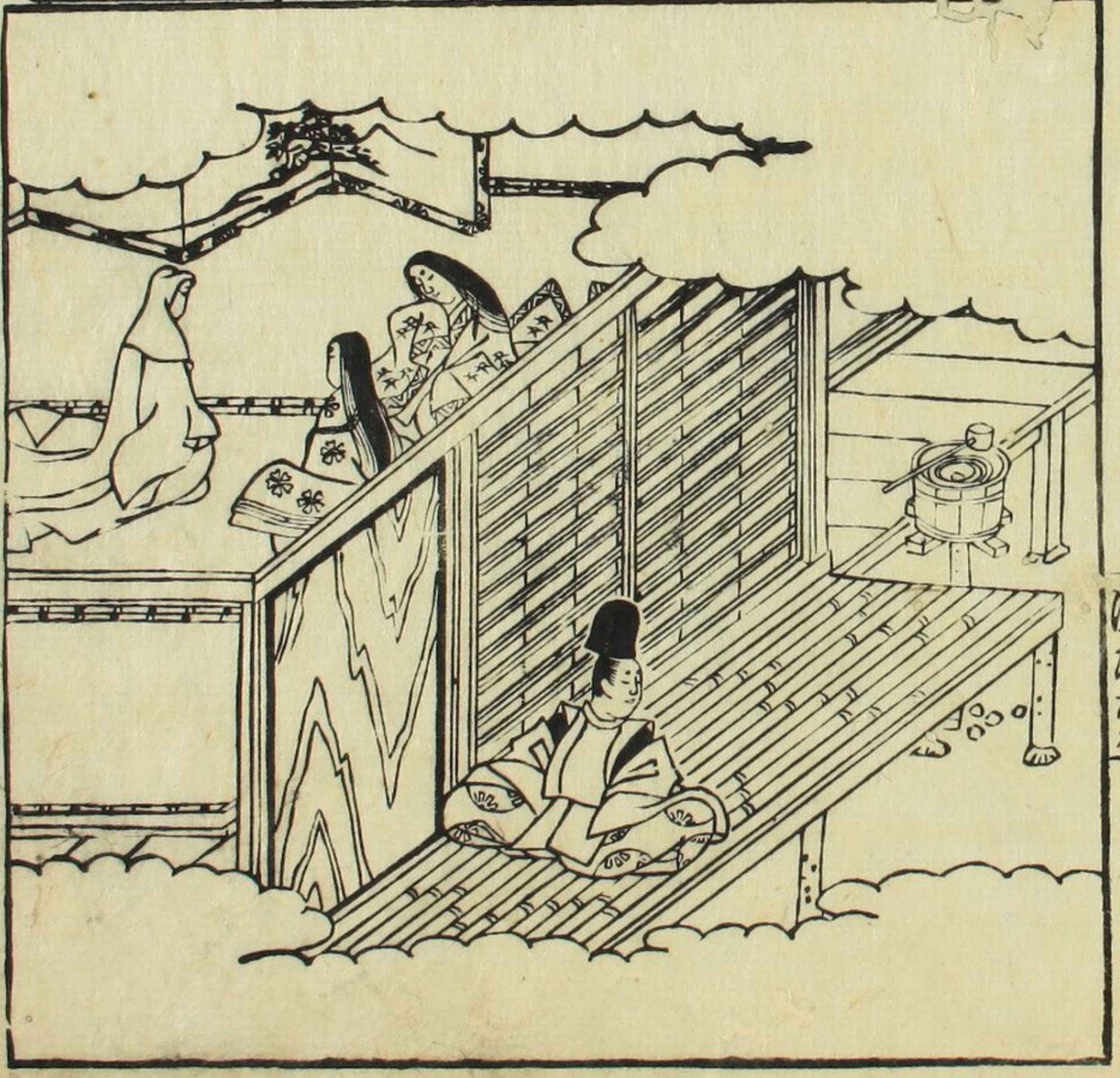


源氏大

一 舟りの本
 うらたてたえうせまひ
 後年月ふまたたおれ
 せまらぬけさきふ中
 のまにあやめあふのち
 りかたはあつしあせ
 うらたてたえうせまひ
 わつれあつしあせ
 おのちふた金を幸ふ
 あまひて後大ね
 舟り本とあるを
 これりあつしあせ
 いまゆめあ
 中島貞宜
 舟り本のついで
 しやうり



舟り本
 うらたてたえうせまひ
 後年月ふまたたおれ
 せまらぬけさきふ中
 のまにあやめあふのち
 りかたはあつしあせ
 うらたてたえうせまひ
 わつれあつしあせ
 おのちふた金を幸ふ
 あまひて後大ね
 舟り本とあるを
 これりあつしあせ
 いまゆめあ
 中島貞宜
 舟り本のついで
 しやうり



舟り本

鬢鏡後序

源氏鬢鏡者依源氏物語卷號著圖撰述世誹諧發句爲篇雖曰玩物喪志而未可始無意義也蓋源氏物語雖陽託醍醐冷泉之聖朝而陰補史家失職之闕文走筆於行事之蹟探趣於人情之願詞意艷美以宛轉意義曲節而隱微是以不善讀者誤人多矣三綱於禮男女之交情其於善者則思周召之正風其不善者則刺鄭衛之變音所以紫氏爲之私泣明皇貴妃之綿恨其意可見也侈者示命途多差憂

者喻遇合有時緝紳鑑此以正朝儀君子鑑此而明得失至若花晨憐霞以愛春日之難永月夕悲露而傷秋山之易落詞林攀材歌仙煉丹豈無能鑑此耶可謂紫氏寶鑑也昔唐太宗曰人有三鑑以銅爲鑑可正衣冠以古爲鑑可知興廢以人爲鑑可明得失世讀源氏物語者無鑑於此寧無耻紫氏之筆耶夫以當今之世干戈不勤治致泰平日既久矣民偃其風各鳴其安則翫誹諧盛於古昔雖云未及風雅之德而氣象溫和風俗不頑於是乎有可共

言者也。是以小嶋氏宗、賢鈴村氏信房共撰此篇。其要自依此篇以入紫室，便照寶鑑以內省也。見此篇者，無以鑑此，則二氏之用心亦可耻也。所以其號源氏鬢鏡之微意，在茲哉。古人有源氏小鏡，又何意也。二氏乃雞冠氏令德門人，令德氏是松永氏貞德高弟也。二氏之於誹諧，其傳有所由來云。

萬治庚子臘月之日，偶應其需，妄識其後。

洛下素栢撰

注大傳馬三町目
鱗形屋板

